

報新団教

定 価 1部150円(本体137円+共214円)
 予約購読料 1年分 千共 5,350円
 紙代のみ 3,750円
 振替 00140—9—145275

本紙を購読ご希望の方は、前金を
 そえて、お近くのキリスト教書店
 へお申し込み下さい。

教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX 03(3207)3918
URL <http://uccj.org>
発行人 秋山 徹
編集主筆 嶋田 恵 悟
印刷所 株式会社きかんし



6 月に喜びの献堂式

母国語で福音を聞く恵み

在外宣教師活動報告

移住地で受け継がれた信仰

2019年5月に、パラグアイのピラポ移住地のピラポ自由メソジスト教会に赴任しました。2015年に知花スガ子宣教師が神様の導きによってこの教会の信徒と劇的な出会いをし、40年間ほぼ無牧だった教会に常駐の牧師として遣わされました。知花牧師は4年の間に土地を購入して新会堂を建築しました。その後任として着任し、6月23日にパラグアイ各地とブラジルからの参列者35人を与えられて、喜びの献堂式を執り行いました。

ピラポ移住地は、1960年8月2日から入植が始まり、別の移住地から移ってきたJICA職員でキリスト教徒の酒井夫妻が教会を建てて礼拝を始めました。自由メソジスト教団

からエンカルナシオン教会に派遣された塚本登牧師が、ピラポ教会で毎月礼拝を献げるようになりました。塚本牧師は長くパラグアイにいて多くの日本人移住者に授洗し、最盛期にはピラポ教会に20名近い信徒がいたそうです。1980年代半ばには塚本牧師が去った後、様々な教派の牧師が巡回して牧会しました。

1990年代にJICC Aがパラグアイから撤退

したとき、教会の土地は JICA 所有で宗教団体に寄贈できず、ピラボ市に移譲されました。建物はそれまで通り使用可との約束でしたが、やがて使用が困難になって、23 KM 地区の旧小学校寄宿舎を借りて礼拝をするようになりました。知花牧師が出会ったときには、教会員は数名でしたが、その方々は毎週日曜日に集まって、礼拝説教のテープを聞いていまし

関係も固定化しているため、これまで何十年も付き合ってきた人を急に教会に誘うことは大変難しい状況があります。また、日曜日に日本人会の行事があることも多く、付き合いがあるので教会員も参加します。

パラケアイには自由メソジストの日系教会が3つあり、首都アスンシオンの日系自由メソジストの教会がブラジル自由メソジスト教団日系年会パラ

抗感があり、単立のプロテストメント教会として新しい一步を踏み出そうとしています。そのための法人化手続きが今後の課題です。

また、イクアス移住地にも信徒がおり、信徒の家の離れで礼拝を守っていました。10年以上前にこの方が帰国してから場所もなく、集会もなくなりしました。ここでも9月から礼拝を守ることになりました。ピラボから

はバスで3時間以上かかるため、昼頃着いて一緒に食事してから礼拝を守り、お茶を飲みながら交わりをしました。その晩は宿泊したので夕食も一緒にしました。これから毎月礼拝を守る予定

で、クリスマスやイースターにはピラボ教会と一緒に礼拝と聖餐をしたいと願っています。どうぞ覚えてお祈りください。

(江原有輝子報／ピラボ自由メソジスト教会牧師)



新会堂の外

現地のコミュニティと連携して

ユニオン日本語教会は、ニューヨーク州スカースデールにある日本語教会です。1989年9月、日本語による福音宣教を始め、今年9月に創立30周年を迎えました。創立以来ヒチcock長老派教会に礼拝する場所を提供してもらい活動が続いています。

ニューヨークには多く

の在留邦人が住んでいます。現在でも多くの日系企業が進出しています。しかし、ひとたび国境を越えれば、そこはアメリカです。別の言葉が話され、別の文化があります。言葉や生活習慣の異なる社会の中で暮らしていると、日々の緊張感からいつの間にか疲労が蓄積しています。また同じ言語

や文化に生まれ育った者にしか分からない苦労もあります。

そのような信仰者たちが教会に集まって主の食卓を囲み、母国語で語られる福音を聞くことのできる主の日の礼拝は、み恵みに満ちた特別なひと時です。

アメリカの教会の伝道はアウトリーチと呼ばれ

でなく、こちらから積極的に出て行って人びとに福音を伝えています。

具体的には地域社会への奉仕活動のことで、ユニオン日本語教会でも現地のコミュニティと連携して様々なアウトリーチ活動を行っています。

「絵本の会」(子供のための英語絵本読み聞かせの会)、「リビングインアメ

プ@ユニオン」を開いています。これは季節のクラフトづくりの会で、世界の様々な国や地域出身の方が参加している国際色豊かなプログラムです。この秋からは教育相談ワークショップを始めました。日本からの子供たちが現地の学校に適應して楽しく過ごせるよう、お手伝いできればと

方々にも広く開かれたア
ウトリーチ活動を通して、
ニューヨークで日本語に
よる宣教活動をするこ
とを多くの人に理解し
てもらい、これからも地
域の人びとに愛され、信
頼してもらえる教会に成
長できればと願っていま
す。

ユニオン日本語教会に
与えられている大切な役

しさを称賛する。子どもだけが、その姿の滑稽さに気づき、裸であることを指摘した。▼多くの人に親しまれて来たハンズ・クリスチャン・アンデルセンの童話『裸の王様』は、人間によって造られる権威の本質を描いているのではないか。▼

荒野の旅を終えて定住生活をはじめた民は、王を立



上、ピート・ジョーンズ牧師（ヒッチコック長老派教会）と筆者
下、Workshop@Unionの様子



新会堂の外観

荒野の虎

高御座に立つ「天皇陛下」に、民意によって選ばれた行政府の長が「万歳」三唱。多くの人が「すばらしい文化」と誉めそやす。その意味を問い、消極的な意見を述べようものなら、無知蒙昧なやからと嘲笑される。▼ある国の衣服が大好きな王に、いかさま機織り師たちが、自分の位にふさわしくない者や馬鹿者には見えない布で造ったという実際には無い服を着せる。大臣や役

▼伝道資金小委員会▲

「伝道交付金」申請額の 91・5%

第2回伝道資金小委員会が10月3日、教団会議室にて開催された。

2018年度伝道資金会計(特別会計)について、担当幹事より資料に基づき説明を受けた。次期繰越収支差額1506万1445円が2019年度に繰り越されることが報告された。

2019年度伝道資金運用状況について、担当幹事より資料に基づき説明を受けた。負担金は9教区より1972万5656円が納入されている。伝道交付金1445円が2019年度に繰り越されることが報告された。

(2019年度4364万9600円)は、14教区に2182万4800円が交付されている。伝道方策交付金(2019年度1090万9626円)は、10教区に545万4814円が交付されていることが報告された。

2020年度に伝道資金の申請があった15教区の申請書の内容について、伝道資金規則、2020年度伝道資金運用指針に基づき審議した。「伝道交付金」の各教区からの申請額が負担金総額(4360万7200円)を超えたために、交付額の算出について協議し、交付額は各教区からの申請額の91・5%(交付額総額4340万3666円)とすること、残金は伝道資金特別会計に繰り入れることを確認した。

伝道方策交付金は申請額の全額(1024万200円)を承認した。残金は伝道資金特別会計に繰り入れることを確認した。

▼韓国・台湾・スイス合同協約委員会▲

青年プログラム開催を目指して

第2回韓国・台湾・スイス合同協約委員会が10月4日、教団会議室で開催された。開会祈禱の後、新たに委員に加わった郭寛城教師(池袋台湾教会)が自己紹介した。

続いて、報告事項として、大韓イエス教長老会(PCK)の総会に秋山徹幹事が出席したと、合同協約委員会が関係している宣教師の近況や人事などについて報告があった。また、台湾基督教長老教会から教団への青年インターンとして胡宜芳さんが派遣され、学生キリスト教友愛会(SCF)を拠点として今年9月から1年間活動する予定であることが報告された。

青年2名参加)、テゼ黙想ツアー(8・9月、スイス・フランスにて、教団から青年5名・台湾基督教長老教会から青年17名参加)、宣教師協力学校協議会主催の夏期青年台湾スタディツアー(8月、台湾宜蘭県寒溪教会にて、協議会加盟校から中学生1名・高校生5名・大学生2名参加)の報告があった。

今後の計画としては、台湾エキュメニカル・フォーラムの第1回アジア地区集会が10月11〜14日に東京で開催され、台湾・韓国・香港・フィリピン・ミャンマーからゲストを招く予定であり、協約委員も集いに部分参加することとした。また、日韓5教団宣教師関係実務者会議が11月18・19日にソウルで開催される予定である。

▼社会委員会▲

台風被災の復旧・復興を祈りつつ



堀川愛生園、左から3番目が伊藤園長

第3回社会委員会(10月21・22日)は、一日目に白河教会(福島県)で開会礼拝と委員会を行い、二日目に伊藤信彦委員長が園長を務める社会福祉法人堀川愛生園(児童養護施設・棚倉町)視察を予定していたが、台風19号直後の開催となったため、白河教会では開会礼拝のみとし、急遽、堀川愛生園に至る周辺地域の被災状況視察が組み込まれた。

小さな河川が多数氾濫した今般の特徴により、広範囲にわたっていたところ、被害が認められ、各地の復旧・復興が一日でも早く進むようにと祈りを合わせた。そのため、当委員会が窓口の「台風19号豪雨緊急救援募金」が十分に用いられるように願うものである。

その後、堀川愛生園で委員会を開催。宣教委員

◆カルト問題全国連絡会◆

現状とカウンセリングの必要性を共有

10月24・25日と、仙台の茂庭荘で2019年度カルト問題全国連絡会がもたれた。今回は韓国基督教長老教会のイ・ジェヨン総幹事、ホン・ヨハン国内宣教師、通訳の長尾有起氏(教団宣教師)を迎え、山口弁護士と鈴木エイト氏(「やや日刊カルト新聞」主筆)を講師に、30余名の参加を得て開催された。

一日目はまず、山口弁護士の「統一協会の現状」と題した講演と鈴木氏の「カルトの状況」と題した講演がなされた。

山口氏は、自身の東大紛争時代の経験を交え、統一協会との関わりに言及しながら、現在に至るカルト被害への弁護士活動、また法的働きでは解決されない心の問題を扱うカウンセラーの必要性を語った。

続く鈴木氏も、自身とカルトとの関わりに触れながら、「やや日刊カルト新聞」の働きやカルトの現状について、特に日本への政治との関わりを交えながら、二日目は各教区報告がなされた。その中で、問題が指摘され、警告されているネット媒体「クリスチャン・トゥーデー」に関わり続ける教師や団体への対応や、新しく活動を始めた「異端カルト110番」への連絡

ら、あまりふれることの出来ない情報を提供してくれた。夕食後は、近年課題となっているカルト・カウンセリングを担う者の育成を念頭に、「カウンセリングの具体的方法」と題して、豊田通信牧師と竹迫之牧師が経験をもとに発題した。それぞれの体験を通し、相談者への対応や被害者への対応のあり方を示唆してもらった。

会のかかわりを話し合い、「連絡会」はカルト問題を「異端」問題として対応していないことに留意しながら協力していくことを確認した。

会は、事務局報告と総括協議、新しく柳本伸良氏を世話人に出し、次回の倉敷での開催を決定して、柳本氏の祈禱をもって閉会した。

(坂田 進報)



左から、ホン・ヨハン国内宣教師長、イ・ジェヨン総幹事、長尾氏

【日本基督教団年鑑刊行のお知らせ】

このたび、日本基督教団年鑑2020年版を刊行致しました。前年版以降の新たな情報を満載しておりますので、是非お買い求め下さい(定価3200円+税)。また、是非アンケートハガキにお答えいただき、当年鑑についてのご感想やご意見をいただければ幸いです。来年4月発行予定の追録をお送りします。なお、直接お買い求めの場合は事務局総務部までご連絡下さい。

(Tel 03-3202-0541、FAX 03-3207-3918、e-mail somu-b@uccj.org)

2019年11月

日本基督教団事務局 総務部

「障がい」を考える小委員会

全国交流会のプログラムを確認

10月21・22日、第2回宣教委員会の報告を受けた。委員会は開催。一日目は「障がい」を考える全国交流会についてプロ

を訪問。協議では、常議員会、

の、園長の福井生氏と職員から話を聞き、食堂で、障がい者の方々、職員、ボランティアの中高生たちと昼食を共にした。食後、自己紹介、歌の披露などがあり、最後にフォークダンスを一緒に踊った。

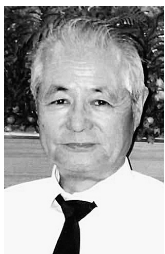
年に開園。設立時は児童施設であったが、1989年、全員が18歳を超えたため成人施設に転換。現在、入居している障がい者38名の内35名、職員38名の内36名がキリスト者であり、日曜日には近くの能登川教会の礼拝に出席している。「はりえの部屋」には「洗礼を受けて、うれしかったです」という作品がある。人のぬくもりを大切に職員は「止揚学園は法

的には施設。でも私たちの関係はサービス関係で成り立っていない。みんな仲間、家族」と言葉が印象的であった。帰り際、皆さんが、見えなくなるまで、手を振ってくれた。止揚学園を訪ねる人々は、毎年2000名ほど。分断が広がる時代、止揚学園の存在が輝いて見えた。

(徳田宣義報)

事務局報

橋本高幸氏(隠退教師)



19年7月12日逝去、92歳。栃木県生まれ。59年日本聖書神学校卒業。60年より津川教会を牧会し、06年隠退。遺族は娘・梅崎啓子さん。

國安敬二氏(隠退教師)



19年10月26日逝去、94歳。大阪府生まれ。50年日本基督教神学専門学校卒業。53年より駒澤、幕張教会を牧会し、農村伝道神学校に務め、幕張教会を経て16年隠退。遺族は姪・大澤美子さん。

教師異動

東洋英和女学院 辞(教)深井智朗

EMS(連帯福音宣教会)訪問

EMSとの関係深化に向けて

団体で、ヨーロッパ、アジア、アフリカの3大陸にある28の教団、宣教団体が加わっています。教団も創立以来EMSに加盟し、部落解放センターや教師活動の支援、ミッシェン・ボランティアーの派遣、ユース・ボランティアーの受け入れ、国際会議に参加する機会の提供など、教団が世界の教会とつながっていることを証しする重要な絆となっています。東日本大震災の時にはEMSの呼びかけで世界の教会からの多大な献金が寄せられ、福島原発事故による放射線検査や仙台や釜石、石巻などで人道支援の活動を展開する推進力となりました。また、EMSは日本基督教団だけでなくドイツの教会が150年にわたって日本で展開してきた宣教活動によって生み出された京都の宗教センター(TSJP)や富坂キリスト教センターなどとの長い歴史を持つ関係、アジア学院などと、新しい関係もあり、NCCとの関係で活動を行ってきた歴史があります。

今回招かれたのは、EMSとこれらの日本の教会や宣教団体との関係を整理して、教団としてより責任を持てる関係にして行きたいとの願いを実現するためでした。というのも、教団はEMSの正会員でありながら、日本でのEMSの活動に無関心であることが多く、EMSの方もNCCとの関係で活動を進めることが多かったからです。

ケルスティン・ノイマン総幹事やベンジャミン・ソロモン担当幹事、スタッフたちとの綿密な話し合いによって、今後EMSの日本での活動はすべて教団を窓口とすること、教団もさらにEMSのプログラムに参加し、世界の教会の宣教活動の一端を担うよう努めることになりました。

10月の初めにドイツに行き、シュトゥットガルトのEMS(連帯福音宣教会)の本部を訪ねて、教団とEMSとの関係を整えるための話し合いの時を持ち、その後、フランクフルトで開かれたEMS主催の「教会の課題としての宗教間対話研究」を主題とする国際会議に参加して、ドイツを中心とした教会との宣教協力関係について発題し、協議に参加してきました。EMSはドイツを中心とする世界的な宣教団体で、ヨーロッパ、アジア、アフリカの3大陸にある28の教団、宣教団体が加わっています。教団も創立以来EMSに加盟し、部落解放センターや教師活動の支援、ミッシェン・ボランティアーの派遣、ユース・ボランティアーの受け入れ、国際会議に参加する機会の提供など、教団が世界の教会とつながっていることを証しする重要な絆となっています。東日本大震災の時にはEMSの呼びかけで世界の教会からの多大な献金が寄せられ、福島原発事故による放射線検査や仙台や釜石、石巻などで人道支援の活動を展開する推進力となりました。また、EMSは日本基督教団だけでなくドイツの教会が150年にわたって日本で展開してきた宣教活動によって生み出された京都の宗教センター(TSJP)や富坂キリスト教センターなどとの長い歴史を持つ関係、アジア学院などと、新しい関係もあり、NCCとの関係で活動を行ってきた歴史があります。

教師異動

愛泉 辞(兼主)深井智朗	教師異動
東松山 辞(主)野村忠規	教師改姓
大阪台湾就(主)翁 思恵	伝道所開設
北備 辞(代)小野 輝	石垣農村 907-0002
〃 就(代)梅崎須磨子	1 石垣市字名蔵
東北学院大学 辞(教)永井義之	243-4407
	教会所在地変更
東和歌山 640-832	
2 和歌山市秋月55	
3-11	
番町 102-0085	
東京都千代田区六番町	
7-12	
伝道所所在地変更	
八戸北 031-0003	
八戸市吹上 1-7-16	



「みんな仲間、家族」、止揚学園訪問

信仰職制委員会

按手を巡る答申、加筆修正

第3回信仰職制委員会が、10月17・18日に全委員の出席と秋山徹総幹事、担当幹事の陪席のもと教団会議室にて開催された。

前回議事録承認の後、既に持ち回り審議にて承認

(誤)「当該教師は、正教師検定試験を受験し合格して、教団の正教師としてすでに承認されているので…」

(正)「当該教師は、正教師検定試験を受験し合格して、教団の正教師としてすでに承認されているので…」

認定されているので…」

（下線部が挿入箇所）

また、秋山総幹事からの問い合わせ事項「ガリラヤ会聖書翻訳研究会代表・軽込昇(日本基督教団隠退教師) 教師の要望に関する件」並びに、「日本基督教団徳島北教

社会委員会

度重なる災害の中で

森下 耕

社会委員会は、6月に第2回委員会を岡山の「まびくら」で、第3回委員会を福岡の堀川愛生園(棚倉町、児童養護施設)で開催した。

特に第3回は

委員会コラム

度重なる災害において取り組み課題は多いが、それを共有し、各教区との連携をどのように構築していくか、初動、災害への備蓄、募金やケア、その他の課題をともに分かち合ってきたいと委員会では話し合っている。

(社会委員長)

伝 道 報 告

伝道の
ともしび

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

夜も昼のように光り輝く

詩編 139 編 12 節

東海教区・聖隷三方原病院チャプレン 佐藤 志伸

が彼らに託された働きは、今、聖隷福祉事業団に引き継がれ、すべての施設が「キリスト教精神に基づく『隣人愛』」を基本理念としています。

聖隷三方原病院は静岡県浜松市にあります。1981年、日本で最初のホスピスを誕生させました。現在の「聖隷ホスピス棟」は1997年竣工。27部屋全て個室で、家族も一緒に生活できるように、十分なスペースがあります。また庭の花々や小鳥、猫たちが心を和ませてくれます。

方々、各医大からの研修生も出席します。また、近隣諸教会の牧師や教会員、隠退教師の方々も説教、奨励をします。イエスさまの十字架とご復活の出来事によってもたらされた罪の赦しと永遠の命が告げ知らされ、痛みや苦しみを知り抜いている主が共にいる幸いを伝えます。部屋でも礼拝の恵みに与ることができるよう放送設備も整えられています。

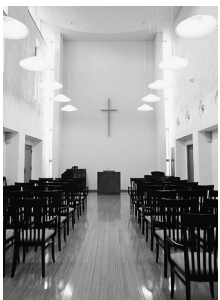
年間約300名がホスピスで過ごします。その中でクリスチャンの方は3〜5名です。ホスピスの礼拝を心待ちにし、入所して来ます。一方、ほとんどの方がホスピスに入って初めて御言葉や讃美歌を聞いたと言っています。「慰められました」、「私のことも神様が愛してくださっているんですね」、そう話してくる方々の顔はとても穏やかです。聖霊の導きにより、イエスさまを救い主と信じる信仰へと導かれ、洗礼を授けてもらう祝福に与った方や家族もいます。

ホスピスに託されていることの中心は、からだの苦痛を緩和することともに、主にある平安のうちに日々を過ごすことができるように祈り、支えることです。そのため、ボランティアさんたちも真心を持ってつとめています。

ホスピスに託されていることの中心は、からだの苦痛を緩和することともに、主にある平安のうちに日々を過ごすことができるように祈り、支えることです。そのため、ボランティアさんたちも真心を持ってつとめています。

礼拝堂では平日朝8時40分から9時まで礼拝をさせていただきます。讃美歌、聖書朗読、説教、祈禱、主の祈りといった次第です。この礼拝には、ホスピスの方々と家族、他病棟や近隣の

聖隷三方原病院外観、筆者、ホスピス礼拝堂、ホスピスの庭



棟や近隣の

◆ 隠退教師を支える運動全教区推進協議会 ◆

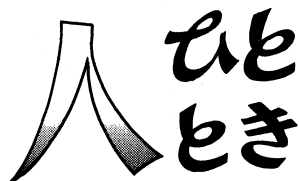
原点を思い起こし、
課題を確認

い金贈呈については、送り主を従来の「教団社会委員会」から「隠退教師を支える運動」に変更すること等の手続き変更を承認。さらに2019年度事業計画および計画額について提案があり、協議の結果、いずれも承認された。

休憩と一同の写真撮影の後、教団伝道推進基本方針の展開と今後の歩みについて、道家幹事より「教団機構改定について」検討課題と現状について報告と説明があった。教団年金制度の近況については中川義幸年金局理事長より教団年金制度概略説明と質疑応答があった。また100円献金を通じて年金制度への引きつぎ協力の要請があった。全体協議会一として、特に各教区、支区、地区の推進活動についてそれぞれの状況と取り組みについて報告があった。

二日目は、全体協議会二を行い、各教区、支区、地区のそれぞれの現状をふまえつつ、今後の推進活動について与えられた課題を確認した。そして、70年前に北海教区で始まったこの運動の原点を思い起こし、現代の教会に導かれ、私たちに信仰を与えられた原点を思い起こし、この運動に取り組む方向が示された。最後に「隠退教師を支える運動」私たちのビジョンを一同で朗読し確認した。

(池田浩二報)



今泉 聖美さん

主に確かな答えを戴いて



クリスチャンホームに生まれ、高校時代に受洗。柏教会員。役員、CS教師として奉仕。

「神さまは、なぜ」その問いは、初めての出産後十日目から始まった。我が子に染色体異常の18トリソミー症候群による重い心疾患があるとわかったのだ。生後1年以内の死亡率9割、治療方法はないと医師に告げられた。1年ほどの命とご存じなのに、神さまはなぜこの子に命を与えたのかと問い続けた。命の糧の母乳さえ、心臓に負担をかけぬよう、ほんのわずかしかなかった。命の力ウン・ダウンが聞こえるような日々だった。

治療という武器を持ってない戦いは、1歳を迎えて間もなく唐突に終わった。我が子の呼吸が止まった静寂の中、死

「この子は御国に入れますか」。牧師は答えた。「きっと入れます」。その時、光が心に射し込んだ。死を超えて復活があること、イエスさまによって死に勝つ命を与えられていることを知った瞬間だった。神さまはすでに天地創造の前に、自分も我が子も、すべての命を愛して造っておられた。それをエフェソ書1章

から知って、「なぜ」への答えが与えられた。主に愛されたからこそ人は生まれ、永遠の命に生きるのだ。この時から、説教の言葉が身内に流れ込むようになった。御言葉の揺るぎなさに強められた。

教会の葬儀には、できるだけ出席しようと考えている。葬儀説教を録音、文字起こしをして後日、ご遺族に贈るためだ。葬儀の時、家族は動転していて説教を聞く余裕がないことが多い。少し落ち着いた頃に文章でなら読めるかもしれない。そこに語られた復活の希望と永遠の命に生きる幸いを伝え続けて行きたい。

この秋、教会員のAさんが92歳で天に召された。おたやかに、しっかりと教会の信仰を支えてきてくださった方だったが、彼女の心には教会がもたらした痛みが深く刻まれていた。

Aさんは、結婚後、夫とその家族が信者だったために教会に通うようになった。ところがその教会は「教団離脱問題」にまきこまれる。1951年、日本基督教団北海教区の半数近い教会が教派教会の結成を目指して教団を離脱した。Aさんの通う教会でも激論の末に離脱を決議

痛みを超える信仰

家族はこの新教会の中心的なメンバーだったようだ。

「一緒に礼拝していた人たちが対立し、教会が割れていくのは、ほんとうにつらかったです。教会が信じられなくなりま

した。あんな思いは二度としたくありません」と、ふだん口数少ないAさんがぎゅぎゅ語ったことが忘れられない。痛みしい分裂を経て設立された教会で、Aさんは洗礼を受けた。その教会も30年を経ずして他の教会と合併し、今はもうない。それでもAさんは、忠実にキリストに仕え続けて各地で教会に連なり、信仰の生涯を全うされた。Aさんが生涯抱えてきた痛みと、そしてそれを超える信仰とを、忘れまい。

(教団総会副議長久世そらち)